

社会科シラバス 中学歴史

1. 学習の到達目標と評価の観点

(科目) 歴史	単位数	学科・学年・学級	使用教科書と補助教材
	週2時間 ×2年 ※3年次は 週3時間	第1・2学年 第3学年1学期	中学社会歴史的分野(日本文教出版)
学習の到達目標	(1) 人間を取り巻く環境や、身の回りでおこるさまざまな事象、また人間存在そのものに対して自然科学と社会科学両面から幅広い視野を持って探究する姿勢を育て、得られた歴史的知識・読解力など情報を活用する技能を実社会の問題解決に役立てる態度を養う。(Science) (2) 異なる文化や価値観に対する理解と日本の今日の姿や歴史・文化などに対する理解を深め、それらを尊重しながら、日本に生活の基盤を置く者としての考えや価値観を世界に発信できる力を養い、現在世界で起きているさまざまな問題を解決するために多種多様な人びとと協調できる人間になる。(Global) (3) 歴史の学習活動を通じて、相手の立場に立って考える姿勢を磨くとともに、人文科学・社会科学の基礎的な知識を結びつけ、論理的に活用する能力を獲得し、変化の激しいこれからの時代を生き抜き、明るい未来を切り拓いていくための教養を身につける。(Liberal Arts)		
評価の観点	<主体性・多様性・協働性>		
	<思考力・判断力・表現力>		
	<知識・技能>		

【点数化が難しい課題については、観点別評価とする。】

A：「十分満足できる」状況と判断されるもの・・・100%

B：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの・・・80%

C：「努力を要する」状況と判断されるもの・・・60%

D：未提出，未実施・・・0%

2、学習内容及び評価方法

中学3年生

月	単 元	学習のねらい	学習のポイント、使用教材等
4月	第5編 第2章 二度の世界大戦と日本 第一部 第一次世界大戦と戦後の世界 1. 第一次世界大戦 2. 日本の参戦と大戦景気 3. 大戦後の世界とアジアの民族運動 第二部 大正デモクラシーの時代 1. 大正デモクラシー 2. 社会運動の広がり 3. 都市化の進展と大衆文化 第三部 世界恐慌と日本 1. 世界恐慌と各国の反応 2. 日本の恐慌と東アジア情勢 3. 日本の進路を変えた満州事変 4. 日中全面戦争と戦時体制 第四部 第二次世界大戦と日本 1. 第二次世界大戦のはじまり 2. アジア・太平洋での戦争 3. 戦時下の国民の生活 4. 第二次世界大戦の終結	○第一次世界大戦が起きた背景や原因・ヨーロッパに与えた影響及びアジアの民族運動や独立運動との関連を理解する。 ○世界のどのような流れを受けて国内でデモクラシーの風潮がでてきたのかをつかむ。 ○恐慌を起点になぜ日本は満州事変から戦争への道を突き進んでいったのかを考える。	・ 第一次世界大戦が総力戦になったことと、その後の世界への影響を確認する。 ・ 大正デモクラシーとその社会的、政治的影響を確認する。 ・ 満州事変の流れとそこからの日中戦争から太平洋戦争までの流れを整理する。
5月	第6編 現代の世界と日本 第一部 平和と民主化 1. 占領と改革の始まり 2. 平和で民主的な国家を目指して 3. 敗戦直後の社会と文化 4. 第二次世界大戦後の世界 5. 国際社会への復帰と 55 年体制 第二部 冷戦下の世界と経済大国化する日本 1. 東西対立と緊張緩和	○戦争への道を進むに当たってどうして止められなかったのかを知り、戦時体制の構築の過程を理解する。 ○戦後、どのように日本が制度を変えて国際社会へ復帰していったのかその道のりを知る。 ○国際社会の変化と現代に残るそ	・ 戦争の過程の中で民衆はどのように生き、戦時中を過ごしていたのかを確認する。 ・ 戦後の改革の全体像を把握し理解する。 ・ なぜ冷戦が起こり、それが日本とどのような関係があるのか、東アジア情勢がどのように変化していったのか、整理する。 ・ グローバル化の中戸のような諸
6月			

2.冷戦下のアジアと日本 3.高度経済成長 4.経済大国となった日本 第三部 1.冷戦の終わりとグローバル化 2.グローバル化の中の日本 3.これからの世界と日本の課題	のつながりを確認する。 ○グローバル化と現代の諸課題を学び、「歴史総合」につなげていく。	課題をあるのか「問い」を立てながら考察していく。
評価の観点及び内容		評価方法（具体例）
<主体性・多様性・協働性>		①：授業中のワークへの取り組み・授業への参加具合
<思考力・判断力・表現力>		②:定期試験・loilo 課題
<知識・技能>		③:定期試験・loilo 課題

【成績評価の概要について】
(1) 学期評価の対象 ①定期考査 ②ロイロ課題（ゲーム機能による小テスト・論述課題） ③ノート提出 ★定期考査未受験の場合、試験実施後に、該当生徒に対して試験問題を送り、期日までの提出があれば、参考素材として素点化(ただし欠席得にならないよう考慮する)し成績に反映させる。提出がない場合は、定期考査は0点となり、②③で成績算出が可能な場合は学期評定をつけるが、算出が難しい場合は、学期評定は空欄となる場合がある。ただし、公欠による試験欠席の場合はこの限りではない。
(2) 学期評定の算出方法 学期ごとに、上記(1)を総合して評価を行う。 一部、論述課題などについては、〔①文章展開／②条件設定／③文字表現／④表現力〕などの観点を設け、ループリック評価をしたものを点数化する。授業時間内の提出を基本とし、授業後の提出に関しては基礎点のみの加点とする。
(3) 学年評定の算出方法 ①各学期に実施する定期考査(年間5回) ②ロイロによるゲーム機能テストへの参加 ③ロイロによる論述課題 ④夏休み新聞記事要約課題 ⑤各学期ごとのノート提出

